

武蔵野日曜集会

キリストの選び

――ガラテヤ書1章――

1975年11月9日(武蔵野)

小池辰雄

戦闘的な書簡 わが根源者は神 無師独悟 恩恵と平安 異なる福音 他力の義 キリストに在る熱心 劇的にして宇宙的な神学 選びの自覚 無我即無限無量 人を救う使命 一切の覚者

【ガラテヤ1】

1 人よりに非ず、人に由るにも非ず、イエス・キリスト及び之を死人の中より甦えらせ給いし父なる神に由りて使徒となれるパウロ、² 及び我と偕にある凡ての兄弟、書をガラテヤの諸教会に贈る。³ 願くは、我らの父なる神および主イエス・キリストより賜う恩恵と平安と汝らに在らんことを。⁴ 主は我らの父なる神の御意に随いて、我らを今の悪しき世より救い出さんとて、己が身を我らの罪のために与えたまえり。⁵ 願くは栄光、世々限りなく神にあらん事を。アアメン。

6 我は汝らが斯くも速かにキリストの恩恵をもて召し給いし者より離れて異なる福音に移りゆくを怪しむ。⁷ 此は福音と言うべき者にあらず、ただ或る人々が汝らを擾してキリストの福音を変えんとするなり。⁸ されど我等にもせよ、天よりの御使にもせよ、我らのかつて宣べ伝えたる所に背きたる福音を汝らに宣べ伝うる者あらば詛わるべし。⁹ われら前に言いし如く、今また言わん、汝らの受けし所に背きたる福音を宣べ伝うる者あらば、詛わるべし。¹⁰ 我いま人に喜ばれんとするか、或は神に喜ばれんとするか、そもそもまた人を喜ばせんことを求むるか。もし我なお人を喜ばせおらば、キリストの僕にあらず。

11 兄弟よ、われ汝らに示す、わが伝えたる福音は、人に由れるものにあらず。¹² 我は人より之を受けず、また教えられず、ただイエス・キリストの黙示に由れるなり。¹³ 我がユダヤ教に於ける曩の日の挙動は、なんじら既に聞けり、即ち烈しく神の教会を責め、かつ暴したり。¹⁴ 又わが国人のうち、我と同じ年輩なる多くの者にも勝りてユダヤ教に進み、わが先祖たちの言い伝えに對して甚だ熱心なりき。¹⁵ 然れど母の胎を出でしより我を選び別ち、その恩恵



をもて召し給える者、¹⁶御子をわが内に顕して其の福音を異邦人に宣べ伝えしむるを可しとし給える時、われ直ちに血肉と謀らず、¹⁷我より前に使徒となりし人々に逢わんとてエルサレムにも上らず、アラビヤに出で往きて遂にまたダマスコに返れり。

¹⁸その後三年を歴てケパを尋ねんとエルサレムに上り、十五日の間かれと偕に留まりしが、¹⁹主の兄弟ヤコブのほかいずれの使徒にも逢わざりき。²⁰ここに書きおくる事は、視よ神の前にて偽らざるなり。²¹その後シリヤ、キリキヤの地方に往けり。²²キリストにあるユダヤの諸教会は我が顔を知らざりしかど、²³ただ人々の『われらを前に責めし者、かつて暴したる信仰の道を今は伝う』というを聞き、²⁴わが事によりて神を崇めたり。

●戦闘的な書簡

パウロは第二次伝道で、コリントから海を渡って、エペソに来た。このエペソでガラテヤ書を書いた。それからずっと戻って来るわけです。小アジア半島の北ガラテヤと南ガラテヤのうち、パウロが主に伝道したのは南ガラテヤです。ガラテヤ書というのは、パウロが伝道したこの辺りの教会に向かってエペソから書いて使いに渡した、というのが一番自然のようです。北ガラテヤという説もあるけれども、私は南の方をとる。紀元54、55年の頃です。「ガラテヤ」という言葉は「ガリラ人の住む所」という意味です。もともとガリラ人はこの辺にいて、それからずっとヨーロッパの西の方へ渡って行った。ケルト人です。ケルトというのはついにはスコットランドまで行ってしまう。

それがガラテヤ書簡です。なぜ、書いたかというところ、せっかくパウロがこの福音を伝えたのに、またユダヤ教に立ち戻ろうとした。

『キリストを信じさえすればいい。何もなくてもいい。行為なんか問題でない』
と言ったような、そんな安易なことがあるか。もつとしっかり行為のことが問題
にならなくてはいいかん」

というわけで、ユダヤ教にまた巻き戻しをした連中があるわけです。それを聞いて、それにだいたいぶなびいている人たちもあるものだから、それで憤然としてパウロはこの『ガラテヤ人への手紙』を書いた。とんでもない話だという、戦闘的な書簡です。この福音に逆ねじをくらわせるようなものだ。マルチン・ルターがその宗教改革のときに、ガラテヤ書が非常に彼に響いてきたのは、そういうわけです。ローマン・カトリックの、「信仰プラス行為」というような考え方に対して、

「信仰だけである」

と言って、このパウロと同じように、ガラテヤ書を彼の武器として戦ったわけです。



●わが根源者は神

「人^{あら}よりに非^{あら}ず、人に由^よるにも非^{あら}ず、イエス・キリスト及び^{これ}之^{うち}を死人^{うち}の中より甦^{よみが}えらせ給^{たま}いし父なる神に由^よりて使徒となれるパウロ、

この出だしから見ても、彼がいかに神的な権威によって自分は立っているかということ宣言しているわけです。始めの「より」というのは「アポ」という字が使っているが、その次は「ディア」です。「ディア」という言葉の方がこの場合は深い意味を持っている。「よってきたところは人によるのではない」というのが、この「人に由るにも非^{あら}ず」ということ。「人よりに非^{あら}ず」というのは、「人から」という、ただ手段的な気持です。後の「人に由るに非^{あら}ず」という方は、

「根源的な、よってきたところの、元をたずねるところの、私の一番の根源なる

ものは神・キリストである、人によるのではない」

ということ。パウロは、ご承知のとおり、ダマスコ途上でキリストにひっくり返されたんですから、誰の手立てによつて福音に來たわけではない。むしろ、福音には真つ向から反對していた。人の言葉になんか耳を傾けなかつたんだから。ステパノのような聖霊の器が語つても、彼はなおさらいきり立つてとうとう、

「汝らは聖霊に逆らう」

とステパノが言つたら、ステパノを殺すことをよしとした殺人の共犯罪なんだ。そのパウロがキリストから、

「なぜ、私を迫害するか！」

とやられた。それでひっくり返されたんだ。全くパウロというのは本当にキリストにぶつ倒された。だから、

「人^{あら}よりに非^{あら}ず、人に由^よるにも非^{あら}ず」

とは全くそのとおりです。

イエス・キリスト及び^{これ}之^{うち}を死人^{うち}の中より甦^{よみが}えらせ給^{たま}いし父なる神

復活のキリストにでつくわしましたから、

「死人の中より甦^{よみが}えらせ給^{たま}いし」

という言葉が、パウロの書簡の中によく出てくる。霊的な実在者であるキリストに捕まえられる。だから、神によつた。わが根源者は神であると言う。

父なる神に由^よりて使徒となれるパウロ、

「キリスト及び神」ですよ。「及び」と言つたつて、キリストと神は、パウロにとっては一つですから。キリストぬきの神は、彼にとつて神ではない。

このガラテヤ書第1章1節を瞑想するだけでも、私たちは——今日は「キリストの選び」と題しましたがけれども——皆さんはキリストに選ばれている。このキリストの選びから脱落したらもう、行くところはないですよ。普通のクリスチャンは、キリストの選びという



ことを本当に受けとつてないから、脱落しても他にいくところがある。けれども、御霊のキリスト者は、それから脱落したら、もう行くところがない。これはヘブル書にも書いてある。

「これから落ちたらどうなるか。もつとも惨めなことになる」

ということ、ヘブル書でも言ってます。私はこの一節を読んだだけで、もう先へ進むのがいやになるくらいに力がくる。

2 及び我と偕^{とも}にある凡^{すべ}ての兄弟、書^{ふみ}をガラテヤの諸教会に贈る。

ガラテヤの諸教会というのは、ガラテヤのアンテオケ、イコニオム、ルステラ、デルベ、そのような教会です。これは第一回の伝道のときにも、二回目のときにも、両方ともそこを通ったから、非常に彼にとつては忘れがたい所です。

●無師独悟

禅宗の方でも、

「無師独悟」

という言葉がある。先生がいない。独り悟る。もちろん、みんな我々は先生がいる。私も先生がいました。あなた方にとつて私が先生か何かは知りませんが。原始福音の連中は手島先生。無教会は内村先生。だけれども、それは、パウロが言っているとおり、

「パウロ何者ぞ。アポロ何者ぞ。ペテロ何者ぞ。問題はキリストだけだ」

ということ。何者ぞ」と言つたつて、何も先生をけなす意味でも何でもない。神さまはその人を通して――伝道というのはそうだからね――具体的な人を通して道を伝える。けれども、いわゆる先生中心主義になつたらば、それはダメ。師恩に、先生の恩に感謝するということと、それを更にバトンタッチして先へ前進すること。先へ前進することのできないような弟子だったら、弟子がいない。キリストはもつとも、

「弟子はその師にまさらず」

なんて言つてらつしやるけれども、それは現場においてはそうです。けれどもまた、次から次へとその人らしい展開をしていくわけです。要するに、キリスト自身が仰つたじゃないですか。

「汝らは我よりも大いなる業をなす」

と。即ち、

「私はお前たちを通して私が地上でやったよりかもっと大きなことをしていくぞ」

というわけです。みな結局、共同作業です。ドイツの本だつてそうなんだ。ある一つの本を書く、次の弟子が――別にまた何か自分で書くのではなくて――これを更に大きくしていく。業というものは、問題は真理そのものなんだ。それを更に拡大し、深化していくというわけです。それをいつまでたつても、「内村先生、内村先生」ではしょうがないんだ。



●恩恵と平安

3 願^{ねがわ}くは、我らの父なる神および主イエス・キリストより賜^{たま}う恩恵と平安と
汝らに在らんことを。

「恩恵と平安」という言葉は、パウロがしょっちゅう使う言葉です。「カリスとアイレーネ」という。恩恵と平安というのは両方とも上からくる言葉です。上との関係です。上から来ている。恵みも上から来ている。平安も上から来ている。これがまた、恵みと平安とは別な言葉かと思ったら、別でも何でもありません。平安は恵みであり、恵みは平安であるということです。何か別なものだと思ったらダメですよ。

「パウロは恩恵と平安と言うが、どういうように違うんだろうか」

なんて。ちつとも違わない。キリストという恩恵がやってくると、そこに本当の平安があるという話ですから。本当の平安があるということは即ち、恩恵をちゃんと受けとっているということ。もちろん、グルント(元)になるものは恩恵です。恩恵の事態が平安であるということです。恩恵を受けとっている事態が平安である。この恩恵は力をもった恵みですから。何かをもらうことではない。キリスト自身が恵みです。即ち、恵みの内容は生命であり、愛であり、力であり、何とでもある。

4 主は我らの父なる神の御意^{みこころ}に随^{したが}いて、我らを今の悪^{あく}しき世より救^いい出^{いだ}さん
とて、己^{おの}が身を我らの罪のために与えたまえり。5 願^{ねがわ}くは栄光、世々限りな
く神にあらん事を。アアメン。

まるで、手紙は終わったようなものだ。もう、始めの4節で手紙はおしまい。その内容が展開していくわけだ。恩恵とは何ぞや、平安とは何ぞや、罪のために与えたとは何ぞや、なんてなわけですよ。

「今の悪しき世」とは、この終末的な世の中、サタンが君臨している世の中。人類なんていうものは、昔から一向進歩してないね。科学だけ進歩している。魂の世界は、進歩でなくて、むしろ退歩している。

「己が身を我らの罪のために与えたまえり」

と。この我執的な人間——万人、誰でもがそうである——その罪のために与えたまえりと。贖罪の愛です。

●異なる福音

6 我は汝らが斯^かくも速^{すみ}かにキリストの恩恵をもて召し給^{たま}いし者より離れて
異なる福音に移りゆくを怪しむ。

「異なる福音」なんて言ったって、本当は福音でも何でもありません。とんでもないまやかしののだと。キリストの恵みは100%なので、恵みの他に何もいらぬ。「信仰のみ」というのは「恵みのみ」ということです。「ソラ グラチア(恵みのみ)」という。それは「カリス(恵み)」と言っ



でもいい。

「カリス(恵み)だけだと。その他に何かを加えるものは、それは異なる福音だ」というわけです。「ソラ フィデス(信仰のみ)」ということと同じことだ。それを受けとることが信仰なんだから。

ガラテヤ書は正に、この「信仰のみ」を徹底的に言おうとした。だからルターが特に、「ただ信仰によつてのみ」

と、「のみ」の字を付けた。パウロが「信仰によつて」と言うのを、ルターは「信仰のみによつて」と、ドイツ語の聖書にはそう書いてある。原文にはその「のみ」はない。けれども、パウロの精神はもちろんそうなんです。

⁷ 此は福音と言うべき者にあらず、ただ或る人々が汝らを擾^{みだ}してキリストの福音を変えんとするなり。

キリストという福音体、キリストの飲^{のみ}びの音信を変えようとする。

⁸ されど我等にもせよ、天よりの御使^{みつかい}にもせよ、我らのかつて宣^のべ伝えたる所に背^{そむ}きたる福音を

異なる福音、背きたる福音を、

汝らに宣べ伝うる者あらば詛^{のろ}わるべし。

「詛^{のろ}わるべし」というのは「詛いとなる」ということです。

「詛い」という字は妙な字で、「アナテマ」という字です。「アナテマ」というのは、神さまへの「献げもの」のことなんです。「献げもの」という字がなぜ、「詛い」になるか。カインとアベルを見てください。カインが献げたものは神さまに呪われた。アベルの献げたものは神さまに祝福された。同じ献げものも受けとられない。呪いとなり、祝福となる。その「アナテマ」という妙な字が呪いの意味にしばしば使われるわけです。神さまに、これはいいと思つたところが、

「どつこい、それはダメだ」

と言われるということが、この「アナテマ」なんです。

⁹ われら前^{まへ}に言いし如く、今また言わん、汝らの受けし所に背きたる福音を宣べ伝うる者あらば、詛^{のろ}わるべし。

それは神さまに受けとられないぞと。

¹⁰ 我いま人に喜ばれんとするか、或は神に喜ばれんとするか、そもそもまた人を喜ばせんことを求むるか。もし我なお人を喜ばせおらば、キリストの僕^{しもべ}にあらず。

「別に行為は問題でない。信仰だけでいい」

というと、何か安易ですね。だから、人を喜ばせているんだと、ユダヤ教のやつらはそう思うわけです。とんでもない。そういう意味で言っているのではない。



「人を喜ばしているのではない。私は神さまの、このキリストの恩恵を100%に受ける、これが神が喜びたもうことなんだ」ということ。

●他力の義

本当に受けとるところには、必ずそこから力が来ます。平安というのは力があるから。一生懸命で行為をしようなんて思わなくても、そこから溢れてくるところの、人を助けるところの行為——即ち愛の行為です——人助けの行為が出てくる。正しい在り方が出てくる。義であり、愛であるところのものが出てくる。行為にもいろんな内容がありますけれども。要するに、本当にキリストを全的に受けとっていく。「全的」というのは質的な意味ですよ、量的ではない。さっきの「全き愛」の「全き」も質的な意味です。

キリストという御霊の愛がくると、それはその時その時でもつていろんな現れ方をする。この全的なものを受けとっていくと——これは本当は「一的」と言ってもいい。「全一的」ということ——全一的な受け方をすると、そこには無限の多様性が出てくる。だから、およそ「こうせよ、ああせよ」なんて言つて、「すべし、すべからず」という律法とは違うんだ。これが本当に、

「よく受けとった」

と神さまが喜んでくださる。キリストが洗礼を受けたときに、

「我汝を悦ぶ」

と言われた。なぜ、キリストは悦ばれたんですか。完全に平伏^{ひれふ}したからでしょ。神さまの前に自分を何もかも誇らなかつた。完全に平伏した。完全に平伏して、

「あなたを受けとります」

と言つて、キリストは神を受けとった。キリストは本当に神の実存を展開していった。キリストは神の恵みを100%に。我々はキリストを通して、キリストの恵みを100%に、力を受けとる。

恵みというのは、逆に言うと、

「恵みは人を恵むことになる。もしそうでなかったら、キリストの僕ではない」

と、パウロははっきり言っている。即ち、キリストの意志を、キリストの御意を完全に受けとつてそれを行ずる、そういう僕ではなくなると。これ、存在と使命が同じであります。ルターが『ガラテヤ書序文』のところにこういう言葉を発している。

「私の心の中には、ただキリストを信ずる信仰のみが存するのであって、キリストは私の日夜持たざるべからざるところの霊的にして聖なる思想の始めであり中であり終りである。」

と。「霊的にして聖なる思想」というのは、霊的にして聖なる思い、そのアルファでまた



まん中でまたオメガであると。ギリシャ語では「まん中」という言い方はない。「アルファ」と「オメガ」はあるけれども。これもルターの言葉です、

「私はすべての自力の義を全く放棄してしまった。即ち、自己の義はもちろん、神の律法の義をも捨ててしまった。ただ、恩恵と慈悲と罪の赦しとによって与えられた他力の義を抱くのみである。要するに、私はキリストと聖霊の与うる義の上に安らかに住まっているのである。」

なんてな、面白いことを言っている。そういうのが、やっぱりルターの自覚であった。ルターはここでも、御霊のことが出てくる。ルターの信仰は霊的信仰であります。「信仰のみ」というが――同じ「信仰」という言葉を使うものだから、困るけれども――霊的信仰です。「霊的」ということは、

「御霊の、御霊によるところの」

ということです。御霊によるところの信仰であります。いわゆる心霊的ではない。

●キリストに在る熱心

11 兄弟よ、われ汝らに示す、わが伝えたる福音は、人に由れるものにあらず。

12 我は人より之を受けず、

パウロはエルサレムで、キリストの兄弟のヤコブには会いましたけれども、ペテロには会っていない。また、ペテロと会っては論争した。そのことは後で出てきます。もう言うまでもなく、パウロがこう言っているとおります。

「人に由れるものにあらず。我は人より之を受けず」

と。そうだよ、いつも反対していたんだから。

また教えられず、ただイエス・キリストの黙示に由れるなり。

イエス・キリストの御霊の働きによるのである。キリストの黙示によったと。

皆さんも、聖書を読んで考えるときには、祈りの世界で考えなくてはいいかん。祈り心をもつて考えているところに黙示が、示しがくる。祈りのないところには黙示はこない。

13 我がユダヤ教に於ける曩の日の挙動は、

自分でもうよく知っている。彼はもう思い出すのもいやなんだ。

なんじら既に聞けり、即ち烈しく神の教会を責め、かつ暴したり。

とんでもない悪いやつだった。暴力団だったと。

14 又わが国人のうち、我と同じ年輩なる多くの者にも勝りてユダヤ教に進み、サウロは何百人のうちの一番だったからね。

わが先祖たちの言い伝えに対して甚だ熱心なりき。

「熱心」という字は「ゼラス」「ジェラシー」という字で、「妬み」という字と同じです。ギリシャ語では「ゼイロテース」という。そういう熱心だった。律法および言い伝えに熱心



であった。

¹⁵ 然れど母の胎^{たい}を出でしより我を選び別ち、その恩恵をもて召し給える者、
¹⁶ 御子をわが内に顕して其の福音を異邦人に宣べ伝えしむるを可^よしと給える時、われ直ちに血肉と謀^{はか}らず、¹⁷ 我より前^{さき}に使徒となりし人々に逢わんとてエルサレムにも上らず、アラビヤに出で往きて遂にまたダマスコに返れり。

曠野に出て瞑想して、福音を本当に受けとつてからまた戻つてきた。「御子をわが内に顕して」というのはもちろん、ダマスコの体験から来たところの事態です。

ユダヤ教を盾にして、神に対して熱心であつた。こういう熱心は自己を立てている熱心なんです。

「我こそは」

なんてね。この「我こそは」という自己を立てた熱心は、これはサタンの手下になる。神・キリストに在るところの熱心は違うんです、同じ熱心でも。神の熱心、キリストの熱心、御霊に在るところの熱心と、神に対する熱心は違う。クリスチャンでもそうですよ、キリストに対して熱心は危ないですよ、そういう熱心は、そういう信仰は。そうすると、人を審く。パリサイになる。宗教戦争式なことになる。

キリストに在る熱心はまちがいない。これは敵をも愛する熱心だから。敵をも救い上げてしまう熱心だから、宗教戦争にはならないんだ。あらゆる宗教も、インチキでないようなものは全部これを吸い上げてしまうような、何でも包摂してしまうような、もの凄い宇宙的なことになってくる。私の御霊は——「私の御霊」なんていう言い方はおかしいけれども——私は、

「御霊は何ものとも代えられない」

と言うのは、もの凄い深さと、無限の深さと無限の広さとを持つているから。概念規定でもって品定めすることはできない。

●劇的にして宇宙的な神学

私の神学をそのうちに書くつもりです。私は「愛の神学」とパンフレットに書いたが、「愛の神学」もいいんだけど、「愛」という一つの概念になってしまうと、これまた困る。「愛」は、それは一番いいんですよ。いいんですけども、愛という概念を含んだ言葉をもうひとつ絶すると、どうしても、「無」になる。だから、私は

「無の神学」

と書くかもしれません。いろいろ反対を受けるか何か知らんけど。中心は愛だけれども、これは表現できない。表現できないから、どうしても「無」になってしまう。ドラマチックな、劇的にして有機体的な、あるいは宇宙的と言つてもいい。

「劇的にして宇宙的な神学」



なんて言ったら、普通の神学者は笑うだろうね。

「とんでもない、あの野郎は。少し頭がおかしいんじゃないか」

なんて。第三巻はそういうことになる。私は第三巻まではどうしても出したいと思っています。

第一巻(『無者キリスト』)は出来たんです。まだ、ケース(函)が出来ないものだからここになんていっても。これはもう、ある意味においては、アルファでオメガなんです。私の言わんとしていることは、ある角度でもって全部入っています。

「神学」と言うと、手島さんも、無教会もみんな「神学」が嫌いなんだよ。私はつむじ曲がりだから、神学ということを使う。神学ならざる神学、あるいは霊学と、霊的神学と言ってもいいんだ。学問でありながら、学問を絶するようなものが書けるかどうか知らんけれども。ロゴスでありながら、ロゴスをはみ出たものです。

私は、大学時代に佐藤繁彦先生の『ルターの根本思想』という本を読んで、

「ああ、素晴らしいな、これは。抽象的な言葉を使っているけれども、実に烈々た

るものがこの中にある。それだけのしつかりとした骨格を持っているな」

ということを感じて、感激して読んだ。無教会では神学をけなしているからダメだ。無教会はただ「信仰」と言っているけれども。それは悪くはないよ、もちろん神学がなくなつて結構なんです。無くていいんですよ。無くていいんだけど、このパウロの中には、どんな思想が来ても揺るがないものがある。だから、「神学」という表現があまり当てはまらないとも言いたい。

なにしろ、最後の新天地の来るまでは、神さまの最後の日が来るまでは、地上はどうせそのうちにひっくり返るでしょう。それは聖書に書いてあるとおりです。「聖書に書いてあるとおり」というのは、黙示録にある通りのことが起きるというものではない。黙示録のこと、これはみんな暗号です。徴、象徴なんです。現実はどういうものが来るか誰にも分かん。パトモスでヨハネが示されたときには、そのように示されたから、そう書いた。ただし、これは一つの符号なんだ。けれども、確かにそれは真理を持っている。この符号が一体どういう現実を最後には迎えるのかということとは誰も分かん。

「一切の過ぎ行くものは象徴に過ぎない」

と、ゲーテが言っている。象徴に過ぎないけれども、その象徴の奥の世界が象徴を通してだんだん霊視されていく。スエーデンボルクなんていうのは、その霊視のできる人だったでしょう。しかし、スエーデンボルクが霊視したことが直ちに現実であるとは、またこれが言い切れない。

とにかく、人間の側からはどう表現しても、表現しつくすことはできるものではない。問題は、結局は神学ではない。その最後は、ただそこに生きることだけです。生きること自身がもちろん終りなんです。ただ、あまりロゴス的な組織神学なんてあるから、また癩



にさわるから、

「組織ではないんだぞ」

ということを言うために、私はそういう神学をいつペン書いてみたいと思っただけの話です。組織神学なんて、まるで整ってしまつてき。整ったようなものではないですよ。音楽とか、ドラマとかというのが一番、真理を表すのに近い。ただ音楽は概念の世界が全然ないから、これまた困つたものだけでも。

● 選びの自覚

そういうことで、

¹⁵然れど母の胎^{たい}を出でしより我を選び別ち、その恩恵をもて召し給える者、

今日の話はこの「選び」です。皆さんは、パウロさんと同じように、

「パウロさんは、それは選ばれたでしょうが、私は大した選びではない」

なんて思つては困る。皆さん一人びとりが本当に選びの器なんです。もし、選ばれているということの本当に自覚しないなら、この集会をやめてくださいよ。この集会に来ている人は、自分の選びの自覚を持つている人、またこれから持とうとする人です。その選びの自覚は――自分の側には何もないですよ――

「自分はこれだけのものであるので選ばれました」

なんていうものではひとつもない。逆に、

「これくらいダメでありますから選ばれました」

ということ。イスラエルの民は頑^{かたく}ななしょうがないものだから、神さまは選んだ。イスラエル人というのは「頑^{かたく}な民」という。我々はみんなそのダメなんだ。ダメでない人があるかもしれませんが。しかし、相対的にダメでないなんて思つたら、それこそダメなんです。それはもう五十歩百歩でみんなダメなんだ。さつさとダメになった方がいい。

「ああ、我悩める人なるかな」

とパウロが言つたとおり。

「ああ、我矛盾なる者なるかな。ああ、我何々なる者なるかな」

と、みんなご自分の胸に手をあてると、そういう叫びがあるでしょ。それはそれでいいんですよ。

「だから、お前を選んだ。私の恵みを本当にやろうと思うんだよ」

と、神さまは言う。自分でどうにも始末がつかない我々を、その始末をつけてくださるのがキリストです。その十字架と甦^{よみがえり}りの生命と聖霊です。これが始末をつけて――始末をつけるどころの騒ぎではない――どしどし展開させてくださる。

しかも、地上においては矛盾構造です、戦闘です。自分自身としよつちゅう戦つてます。戦っているけれども、苦しくないんです、この戦いは。感情的には苦しい面があるかもしれない



いよ。けれども、必ず勝利が来ているところの平安がある。必ず勝つという確信ならざる確信がある。これは御霊を受けとっているから。キリストの十字架を本当に受けとっている、これは問題ない。大体、十字架を本当に受けとらないんだものね。

●無我即無限無量

十字架というのは、

「もう全部、君のどんな問題も全部、私は引き受けたよ」

というのが十字架なんだから。もう、無条件にです。「それでも」とは言わせないんです、キリストは。「それでも、こうです」なんて言わせない。

『それでも、こうです』なんて言う人は、どうぞ他へ行ってください。どうぞ他へ行つて、どこかで救いを求めてください」

と、イエスは言うんだ。

「私の救いは、お前を無条件に、どんなことであつても救う」

と。殺人犯が片一方の十字架にいたじゃないですか。もう片一方の盗賊がキリストに、

「お前、俺たちを救つたらいいだろう」

なんて、傲慢に言った。すると、こちらの方は、

「お前は何を言うか。さんざん悪いことを我々はしたから、十字架に架かるのは当然なんだ。お前は神を畏れてない」

と。「神を畏れてない」と言った。神を畏れるところまで来たんです、こっちは。

「せめても、私を覚えてください。聖国にいらっしやるときに」

と。そうしたら、キリストがこれに、

「今日、私と一緒に天国だ。パラダイスだ」

と言われた。こういうことですよ。これは砕けの魂です。

人類は、これかあれかに分かれる。人類を二つに分けるものは、魂が砕けるか砕けないかだけである。正邪でも、善悪でも、強弱でも、美醜でも、賢愚でも何でもない。そういったような相対的な判断ではない。問題は、砕けるか砕けないか。しかも、人間は砕けきれない。砕けきれないのが、人間が罪びとであるということです。

キリストの十字架が砕けそのものである。この砕けそのものを受けとるところに、本当に自我からはずされた無我の境地が来ている。だから、無我即無限無量になるということは、その無限無量はここから来るところの聖霊です。

もう、何度言つたって、しょうがない。私は死にいたるまで、これは言わざるを得ない。言いながら、自分はどんどん深く入っていく。あなた方も聞きながら入っていく。

「あつ、それは知ってますよ」

ではダメです。数学の世界は、「 $2+2=4$ 」「 $2\times 2=4$ 」。そういうのは数学の世界で、



「分かってますよ」

というわけだ、眠っていても。ところが、この福音の真理というものは、常に新たに深く入ってくるんです。決して、常識となつてはいけない。

『キリスト教常識』なんていう雑誌がある。だから、私はあの時、反対したんだよ。

「福音は常識ではない」

と言つて私が反対したのに、塚本先生はとうとう「常識」にしてしまった。私は今でも覚えてる。幾人もいましたが。

「私は福音は常識だとは思わないから、その名前は私は余り感心しません」

と言つたが、やっぱり「常識」にしてしまった。『キリスト教常識』に私はずっとルターのことを書いていたんですがね。どうも、いかんです。

●人を救う使命

ですから、皆さんはとにかく、不思議なんですよ、ここに来ているということは。数えるしかないではないですか。そして、あなた方は、人をあまり引つ張つてこない。それはダメですよ、眠っていたら。

「よし、あの人にはどうしても福音を聞かせたい」

という人がないんですか。誰でも彼でも引つ張つてこないなんて、私は言っているのではない。反抗するやつなんか放っておけばいい。批判するやつは放っておけばいい。本当に悲しみ、苦しみ、求め、悩んでいる人を連れてきなさい。それが本当の伝道です。

福音の世界は、恵みを与えられたら、人に恵みを施さなかったら、これは天国に行かないですよ。しかし、それは律法的に私は言っているのではない。

「一生懸命に恵みを与えようとしたが、とうとう一人も引つ張つてこれなかった」

と。いいですよ、それなら。しかし、それだけのことをしないでいたら、神さまは現象面でご覧にならないから、神さまはちゃんと人の魂をご覧になる。とにかく、

「選ばれたということは、人を救う使命を負わされている」

ということですよ。選ばれているということは使命的な存在である。人を救う使命を負わされているのに、その祈りをもつて行かなかったならば、恵みから外れてしまう。この中には、人を救うために一週間断食なさったという方がいらっしゃる。それで救ってしまった。そういうわけです。

パウロは正反対の悪いやつだったけれども、今度は完全にキリストの中に捕らえられた。それでパウロは、

「俺はやっぱり選ばれていたんだ」

と。こんな悪いやつを救った。

「悪いからこそ、お前を、お前のその悪さを本当に救った」



という、このキリストならば、もうどんな人をも救う。

「私が救われたんだから、万人が救われるんだ」

と、内村鑑三先生もそう言いました。内村先生も、あれも相当悪いやつなんだ(笑)。人を恐がらせたりね、とつつきが悪いんだ。大体、顔を見たつてわかる、内村鑑三、ニーチェなんていうのは。そういう内村先生は、

「私みたいな、しょうがないワンマンだから」

と。大体、ワンマンという人はそうなんです。なかなか質たちが悪いんだよ。なにも権謀術数をするというわけではないけれども、人の言うことを聞かないんですよ、ワンマンというのは。そのワンマンで通つたらお終いです。そしたらダメなんです。そのワンマンがいっぺん砕けなくては。内村先生も、

「本当に自分は十字架でなければやりきれない」

というので、十字架を本当に掲げた。教会以上に十字架を彼は掲げた。それで、内村先生はあのようにつつ走つたわけです。だから、パウロ、ルター、内村鑑三というのはちよつと似ている。手島郁郎も少し似ている。

人間というのはそれぞれいろんな型がありますから、それがいいの悪いのなんていうことではない。要するに、それが本当に砕かれて、キリストに救われたかということ。そのときに本当に自分は選ばれたということが分かる。選ばれたということは今度は、人を救う、助けていくところの義務を使命を負わされる。だから、

「福音を宣べ伝えずば災いなるかな。止むを得ざるなり」

と、パウロは言つた。それでもう、あの当時の地中海の世界を走り回つたでしょ。本当に身を――粉骨碎身というけれども――粉骨碎身そのままだね、パウロは。粉骨碎身でもつて彼は福音のために身を挺して伝道しました。

その点で、とにかく手島さんは大したもんだよ。日本中を駆け回つて、あれだけのことをした。人が百年かかってでもできないことをやつた。人間の質たちはいろいろですけれども、しかし、神さまにとつ捕まえられてやつていく。そのやることは何であるかは、それはその人その人さ。何も伝道しなければいけないというのではないけれども。あなた方は、みんなやらなくてはダメですよ。

「二、三人わが名によりて集まるところ」

には、幕屋を張つていかななくては。

これが選びです。こんな嬉しいことはない。そして、選ばれたら、責任を負わされているから、力が来るんです、必ず。力なしに、責任なんか負わせないんです、キリストは。それが御霊の力なんです。だから、御霊を受けなかつたらダメです、いくら選ばれても、頭で選ばれたと思うだけで。御霊の力が来れば、その人を通して、何だかしらんけれども、その人らしい仕事が始まるわけだ。そして、それは神の、キリストの栄光が現れる。仕事が、



やることをすることがすべて讚美であります。神さまを讃えることです。どんなことをしていてもいい。その業そのものが神讚美である。

パウロはもう自分の過去を吐きだしたいような気持なんです。けれども、彼はそのマイナスの過去を逆にプラスにしてみました。一切の体験は、キリストを受けとる人にとつては、それで悪かったということはない。それ自身はどんな悪いことであっても、それが全部、プラスの跳躍台となる。だから、あなた方は過去を決して悔いることはない。逆にそれを跳躍台として展開していく。人が何と言おうと、そんなことはいい。過去のことを、「あの人の過去はこうだった」と、そんなことを言うやつの方が地獄へいく。

●一切の覚者

これはお釈迦さんの言葉だな。お釈迦さんの言葉にこういうのがある。

「如来曰く、大悟せり。一切の勝者、一切の覚者となれり。無師独悟なり。自ら最上無上の法を悟れり。」

こういうような言葉はもう、キリストは言わなくなつて、キリストはそこへ入ってしまった。我々はこんな大きな言葉は発することはできないけれども、御霊にあつては、これと同質のものがある。同質のものが来ているということが分かるんです。無限に展開していく。ここでもいいなんていうところはない。

どうぞ、皆さんは、キリストの選びの器として——この「選びの器」ということは自分でもつて責任を負おうとしてはダメです、萎縮してしまう——いよいよもつて、キリストの中へ自分を入れていく。それだけなんです、問題は。そうすれば、力がくる。生命がくる。愛がくる。そういう、概念で限定できないようなもの、凄い内容がその人を通して展開していく。どうぞ、そのようにして臨機応変に対処して、そして生き生きと生きてください。

私はこの第一巻(『無者キリスト』)の扉のところにこう書いた。

「この『無者キリスト』を私のたましいの旅路で時機に応じ道しるべとなり
今は北十字星の如く天界に輝いている

「北十字星の如く」というのは、牽牛・織女の橋渡しをしている白鳥座のことです。あれは五つの星が十字の形をしていますから、北十字星という。天の川の中にある。白鳥座です。

内村鑑三先生、藤井武先生、塚本虎二先生、手島郁郎兄、小池政美の
五つの霊星に捧げる。

一九七五年晩夏

小池辰雄

と。そういうのが扉に書いてある。これはぜひ、じっくり読んでいただきたい。あなた方は知っているのがありますけれども、元のままではない。みんなそれが原型で、全然新しく筆を通したものです。詩も少し変わっています、この前書いたものとは。

